「御頭神事」

ふるさとの風
～如月～

「エイトー」「エイトー」・・・
伊勢市御薗町高向大社の御頭神事では、御頭を振りながらこう唱えて拝礼する。

この神事は、昭和５２年５月に国の重要無形民俗文化財に指定された。
現在は２月の第２土曜に行われる。

御頭とは獅子頭のこと。
村人たちは敬意を表してそう呼ぶ。

神事の起こりは、養和年間（1181 年～1182 年）、村で飢饉や疫病が蔓延した際、正法寺の妖童木椙が神庫から御頭を出し、村内を廻って踊り舞ったところ、平安が訪れたことに始まるという。

神事は早朝から深夜にかけて執り行われるが、特筆すべきは大社の神前で披露される「七起こしの舞」。

これは素盞嗚尊の八岐大蛇退治の神話をかたどったものと伝えられる。八岐大蛇がいけにえの奇稲田姫を求めて歩き回る様子の一段目から、七段目には大蛇が神となって天上する。２月の凛と張り詰めた空気に、御頭の力強くも繊細な舞が美しい。

その後、御頭は村中の各氏子へ悪魔払いの「フクメモノ」を行い、夜の「打祭」を迎える。打祭では、松明の火の粉がふりそそぐ中、御頭を高々と打ち降る。燃えさかる炎に照らされる御頭は、まるで雄叫びをあげているかのように雄々しい姿となる。

現在まで続く、８００年以上の歴史を秘めた伝統あるこの行事は、禱屋制で全区民を挙げて行い、また決して「獅子舞」と呼ばないことから、伊勢大神楽などの専門職による獅子舞と同一化することを疑問視する説もある。

また素盞嗚尊については、「七起こしの舞」やその祭祀である天王祭、「蘇民将来子孫の門」の伝承などを考えると、神宮祭祀とは別に、日常祭祀の中での存在が大きく浮き彫りになるようである。

◆　三重のまつり　随想　（松浦良代／著　光書房　L386／マ）
◆　三重の祭　（乾淳子／編　伊勢志摩編集室　L386／ミ）
◆　御薗村誌　（御薗村誌編纂室／編　御薗村　L243／ミ）
◆　祭礼行事・三重県　（高橋秀雄〔ほか〕／編　おうふう　L386／サ）